

ある雑誌を読んでいたら、ジェイムス・H・コーンの『十字架とリンチの木』の書評が掲載されていた。かつて、読んだことがあると、本棚から取り出してみると、多くの付箋がついていた。熱心に読んだのだろう。改めて読み返し、主イエスの十字架の意味を深く考えさせられた。ジェイムス・H・コーンは黒人神学者で、ニューヨーク・ユニオン神学校の教授である。「黒人」と形容されているように、黒人の立場から、鋭く問題提起する多くの本を著している。2011年に書かれた『十字架とリンチの木』は「私の今までの全著作の継続であり、完成点である」と言っているように、読む者に強く十字架を凝視するように迫る。キリスト教は主イエスの十字架に「救い」を信じる信仰である。その十字架は、ローマ帝国への反逆者が受ける、鞭打ちと市中を引き回される屈辱の後、十字架の上で、苦痛の極みで息を引きとる刑罰である。人間が考案した最も残酷な処刑である。主イエスが受けた十字架の歴史的事実は、エルサレム神殿当局、ローマの総督・ピラト、群衆、そして、弟子たちからも裏切られた、リンチ（私刑）であった。この十字架に人間救済を信じるということは、苦難と死は最後ではなく、敗北から希望がもたらされるという価値観の逆説である。この逆説の承認は、謙虚さと悔い改めの信仰によってのみ可能となる。

コーン教授は、読むことが耐えられないほどの、米国において黒人が受けたリンチ事件を列挙している。顔や体は変形するほど殴られ蹴られ、木に吊るされ、焼かれたり、銃で撃たれたりした。「黒人は翌日の明け方まで吊るされた。それは筆舌に尽くしがたい、ぞっとするような恐ろしい恐怖であった」と証言している。このようなリンチを1880年から1940年までに、白人キリスト者たちによって五千人以上の黒人男女は受けてきた。

コーン教授は、主イエスの「十字架」と黒人たちを吊るした惨劇の「リンチの木」を霊的に結び合わせている。そして、「リンチの木に吊るされた黒人のイメージを通してイエスを捉えることなしに、われわれは本当に、ローマの十字架にかけられたイエスの神学的意味を理解できるであろうか」と問いかけ、「死と敗北の象徴を、神は解放と新しい命のしるしに変えられたのである。十字架は、日ごとに大いなる不正に苦しんでいる、『これらの最も小さい者』、社会において無用とされる者との神の愛の連帯を表す、最も力強い象徴である。キリスト者は、恐るべき悲劇であった十字架と向かい合い、かつ信仰と悔い改めを通して、その中にある永遠の救いの解放的喜びを発見していかなければならない」と言う。苦難を負わされ、苦しみ、殺されていく者との連帯において、主イエスの死の意味（救いの事実）を見出すというコーン教授の神学は、福音の真理の核心である。私たちが生きている現在も、残酷で理不尽なリンチとも言うべき事件が日常的に起こっている。ロシアのウクライナ攻撃で、何十万人が死んだのではなく、殺されている。イスラエルのガザ攻撃で、パレスチナ人は地獄の死を強いられている。コーン教授の十字架の福音（救い）は、これらの惨劇が主イエスの十字架と関わっていると捉えるところで、私の問題となり、乗り越えていく可能性が生まれてくると言う。無法な傷と死は贖罪的な意味を持ち、それゆえに、主イエスの十字架が、苦難と死を希望と命に変える逆説をもたらしてくれると信じたい。権力と軍事力が跋扈する現実になす術がないように見える今、絶望的な思いに駆られるが、コーン教授は「キリストの福音は、贖われていない、苦悶している世界における神の解放のメッセージである。それ自体は、我々の霊をこの世の苦悩から引き離された世界へと高める、超越的現実である」という言葉に納得する。本書を読み、十字架信仰は、解放される望みを持ち続け、それを霊的視点で確認することであると示された。